西郷隆盛と霧島

最終回

西郷隆盛の人生訓と最期

昨年は国内最後の内戦「西南の役」が終結し、西郷隆盛が没して一四〇年の節目の年でした。今年は明治となり、日本が近代国家として歩み始めて一五〇年が経ちます。

今回でシリーズ「西郷隆盛と霧島」は最終回です。西郷の人生訓からうかがえる西南の役での最期について紹介します。

戦略のない西南の役

西南の役は、勝つ見込みのない戦いを西郷軍が挑んだのではないかと思われる節があります。西郷軍は西郷隆盛をはじめ桐野利秋、別府晋介、篠原国幹らが指揮しました。倒幕に至る戊辰戦争での指揮や明治政府軍の創設、組織化、育成などを手掛けた第一級の軍人たちです。

本来、戦は戦略の下に戦術を練り、敵に反撃する時間を与えず先手を打って戦いを有利に進めるのが常道です。

戊辰戦争を経験した西郷隆盛らはそのことをよく知っていたはずです。しかし、西南の役での西郷軍は動きも遅く、戦略のないその場しのぎの戦いをしています。西郷本人に勝つつもりがなかったのではないかと疑ってしまうほどです。もし、本当に混乱を収めたかったら、少人数でひそかに東京を目指し、西郷に厚い信頼を寄せていた明治天皇に謁見して西南の役を未然に防ぐ方法を採ったのではないでしょうか。

「明治維新」奇跡の革命

これまで幾度となく述べてきましたが、「明治維新」とは、数百年間続いてきた封建社会体制や身分制度、社会の基本理念を抜本的に覆した「革命」でした。しかも、わずかな歳月でこの革命を成功させたことは、世界中の歴史を見てもまれです。

この奇跡的な革命の成功には、大きく三つの要因が考えられます。

①帝国主義を掲げた外敵の存在
②天皇中心の政治体制
③カリスマ的な指導者がいたこと

アヘン戦争でイギリスに負けた清国の実情を見て一刻も早い政府の擁立を目指さなければならない状況で、古代日本の成立時から王位として君臨してきた天皇を政治の中心に置くことで安定感が増しました。さらには、木戸孝允や大久保利通など明治政府を担う傑出した人物が現れました。

中でも西郷隆盛は、政治や軍事の指導的な立場よりも新政府の精神的な主柱といった存在だったのではないでしょうか。

特に、明治四年から六年にかけての[1]西郷留守内閣は、近代日本の骨格となるような[2]政策を採り続け、安定した政治を行いました。

明治維新のけじめ

西郷隆盛は明治六年の政変によって職を辞し、鹿児島に帰省しました。自分の役目は終わったと思っていましたが、士族たちの不平を目の当たりにします。近代国家の建国に自分が深く関与していたことを鑑み、そのけじめとして、西南の役に身を投じたのではないでしょうか。

西郷は三十一歳の時、月照上人と入水自殺を図りますが奇跡的に助かります。その後、二度にわたり奄美群島で暮らしますが、この時期に「なぜ生かされたのか、これからどのように生き行動していくのか」などについて自問自答し、模索していきます。そうして行き着いた人生訓が、天命に従って生き、自分のことよりも人のために使命をまっとうする自己犠牲の精神・『敬天愛人』でした。

生かされたのが天命であれば、天命に従い倒幕から新政府の樹立にまい進し、「最期の場」を西南の役に見いだしたのではないでしょうか。

（文責＝鈴）

※1　岩倉使節団が欧米に派遣されている間にできた政府。
※2　廃藩置県や地租改正、学制、徴兵制、司法制度の整備など。